

# 炎天河

- ENTENKA -

題字 大東守

挿絵と文 池内文藏



## 第2話

「—どの、いや、瀧覚殿、遠路はるばるご苦労にござった」

玉櫛たまぐし荘池島館しよかいけしまのたちの主殿に着座した正遠まさとは、瀧覚を俗名で呼びかけ、慌てて打ち消した。

挨拶もほどほどに酒肴しゆこが運ばれて来た。雲上人の食卓を賄おほえのみくりやう大江御厨おおえのみくりやの膳はどれも見事なも

のであった。瀧覚の隣に陣取った男が、河内鑄物師いもじの作であろう鉄瓶から「ささ、もう一献」

と大和の銘酒を瀧覚の盃に注ぐ。—水走左馬允康政みずはいさまのじようやすまさ—と名乗るその男は、兜蟹かぶとがにを連想させる

厳つい髭面の中にまるで不釣り合いな屈託の無い笑みを浮かべ、緊張する瀧覚を氣遣きぢってか、

積極的に自己開示に努めた。かれは深野池ふかのいけから瀧覚たちを警備して来た「水走党」の首領で、

大江御厨を掌握するとともに河内之國一之宮である枚岡神社の神職しんしやくを司つかさどり、古くから伝わる

正月の伝統行事「お笑い神事」で笑い続けているうちに「こんな顔になってござる」とさらに

豪快に笑った。

翌朝、正遠は瀧覚たちが乗って来た船で数名の従者とともに鎌倉へと旅立った。幕府が御家人に課す数年に一度の「鎌倉番」で、後世の「参勤交代」に繋がる制度である。

船影が深野池の彼方に消えると、瀧覚は左近に促されて館の裏手に廻った。館内に引かれた水路に一艘の小舟が繋がれており、櫂を手にした雉丸が待っていた。

舟は恩智川を遡上する。

瀧覚たちの目的地へは玉串川を上り、その本流である大和川（現在の長瀬川）に出るのが近いのだが、流域に広がる若江の一带には同じ幕府御家人ながら反北条の色調が濃い「八尾党」の拠点があり、水運を巡って小競り合いが頻発していた。摂津源氏の末裔を称するかれらにとってその傍流である河内源氏が興した武家政権を陰謀と肅清で乗っ取った北条氏の政権など「なにするものぞ」という気概があつた。巧みに操舵する雉丸の向こうに鳥居がみえた。舟は水面に建つ鳥居をくぐり、河岸に突き出した棧橋に横付けした。昼食を左近の館で取る為だった。舟着場の森に小さな祠が在った。祠は左近が神職を司る河内国二之宮・恩智神社の元の社で、摂津源氏を仮想敵と定めた楠木党がこの地に防衛拠点である恩智城を築いた時、「神様を見下ろすのは無礼千万」と憚り、本殿を山の中腹に勧進した。

左近の館で麦飯ととろろ汁が出た。二日酔いと船酔いを気遣う左近の心配りだった。

「夕づとめを頼む」と雉丸に申し付け、今度は左近が櫂を取った。言葉を発することの出来ない雉丸が銅拍子を振って見送る。再び溯上を始めた舟の舳先で左近が「間もなくこの河も暴れ申す」と溜息交じりに呟き、梅雨時の河内平野を瀧覚の脳裏に映させながら、数年前の水難で雉丸が言葉を失うに至った経緯を訥々と物語った。実の子でない事は薄々気付いていたが、小さな身体で泣き言ひとついわずに美濃の奥地から河内へと瀧覚を導いた雉丸に、楠木党の固い結束をみたような気がした。舟は恩智川の本流を離れ、大和川の村落に引かれた水路を経由して大和川に出た。石川が合流する柏原の船着場で年の頃十四・五の若者が出迎えた。かれは―石川源三郎―と名乗り、さらに小さな丸木舟に瀧覚と左近を乗せて石川を上ってゆく。途中の難所では兩岸に待機した源三郎の仲間たちが綱を渡して舟を曳いた。かれらの掛け声を何度か聴いているうちに、空が茜色に燃え始めた。やがて舟は「観心寺荘」の入口に建つ番小屋に繋がれ、ふたりは馬上の人となった。源三郎が轡を取り山道をゆく。その先の橙色の空のなかに、観心寺の伽藍が影絵のように映し出されていた。